荒木貞夫にみる日中戦争期の博物館像（二）

後々田寿徳

はじめに

本稿は、前稿その（一）[1]に続き、荒木貞夫（一八七七～一九六六）が

五．文部大臣（一九三八～一九三九）として文教政策に意欲を持ちながらも、やむなく辞任したこと

六．日本博物館協会会長（一九四〇～一九四六）として、博物館の普及・振興に尽力したこと

を述べ、日中戦争期における荒木の博物館像について検討するものである。

五．文相辞任

荒木の文相時代末期の政策として看過できないものに「学徒隊」構想がある。これは全国すべての学校に「学と行との併行方針から、日頃剛健な気風と実務に堪能なる資質を滋養し、更に天災その他の不測の事故に際しては直ちに実際的奉仕活動が出来得る機構と組織を作らんとした」[2]ものという。

昭和十四（一九三九）年五月二十二日、皇居前広場において「陸軍現役将校学校配属令施行十五周年記念全国学生生徒代表御親閲式」が行われたが、その前日の記念講演会で荒木は、国家総動員体制下において「殊に学業に励みつゝある青年学徒諸子は全国青年の模範たるべき地位に在りまして、随って日頃の鍛錬に於ても一段の用意と努力が必要であります。即ち学校教練を愈々振作して、その他の一般学科に於ける知識の啓発、思想の涵養と相俟って心身一体の強化向上を図り　陛下の厚き御信頼に応え奉らねばならぬのであります」[3]とし、学校教練の重要性を強調した。

親閲式で荒木は「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」を読み、式後全国の学校に「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語ノ聖旨奉戴方」を告知したという。そして同年六月、省内に学徒隊編成準備委員会を設置しその準備をはじめたとされる。[4]

学徒隊は、文部大臣を総監とした全国組織の樹立を目的とし、具体的には一．総合演習・基本演習　二．滑空訓練　三．集団勤労　四．剛健旅行　五．海事訓練　六．防空防護　などを行うとされ、同年秋には結団式をあげる予定であったという。[5]

この構想は前稿で指摘した、荒木の当時の学校教育制度への批判的立場からもたらされたものと解することもできる。すなわち、知育偏重を排した、学校制度外でのさまざまな実践的な教育への試みとも考えられる。第一次近衛内閣以来の責務であった、高等教育機関を中心とした学校改革を一段落させた後の荒木の、独自の文教政策が、この「学徒隊」構想であったといえよう。

しかし、この構想は同年八月二八日の平沼騏一郎内閣の総辞職によって水泡に帰した。荒木は八月三十日付で文相を辞任する。その後荒木は後継首相に任命される可能性もあったというが[6]、結局阿部信行内閣が成立した。荒木は請われて同内閣および次の米内光政内閣の内閣参議を昭和十五（一九四〇）年七月までつとめたが、名目だけの参議であり、何ら国政にかかわることはなかったという。文相辞任は、政界からの荒木の事実上の隠退であった。

なお、前々稿[7]で指摘したとおり、文相時代の荒木が博物館に関して積極的な関心を有した事実は見出すことができない。荒木は帝大改革後、昭和十四（一九三九）年五月十五日に東京帝国大学を視察、講演を行っているが、その際同大学の医学博物館も視察している。[8]同博物館は視察にそなえ急ぎ整備され

たというが、[9]これが荒木の要請でなされたかどうかは不明である。おそらく大学側の自主的なデモンストレーションであろう。また荒木は、当時文部省直轄の唯一の博物館であった東京科学博物館に、特別の優遇措置などは行っていないと思われる。[10]

六―一．日博協会長就任より昭和十六年までの活動

荒木は文相時代に、当時の日本博物館協会（以下、日博協という）会長正木直彦に、文部省美術展覧会関係の会議などで面識があったと思われるが、[11]前々稿で指摘したとおり、昭和十五（一九四〇）年六月の荒木の日博協会長就任の経緯は不明である。

日博協が荒木を会長に迎えたのは、隠退したとはいえ元陸相・文相であり著名人であった荒木の政治力に期待したためであろう。また文相時代のさまざまな実績にみえる、荒木の文教政策への関心の高さもその背景にあろう。後年荒木の回想に「私が棚橋翁と知ったのは昭和十四、五年の交である。君は博物館協会理事長として活躍して居た当時で、私も夙に博物館事業に就ては興味を深くして居たので共に其振興を約した私は不肖ながら推されて其の会長の職に就き終戦まで共に微力を致した。もともと協会は学術の外郭団体であるので、政治性に乏しく、資金を獲得するに苦しみ、幾度か君と関西方面に遊説した事もあった」[12]とある。

荒木は会長就任後、急速に博物館への関心を深めている。就任直後の同年七月二五日の理事会では「博物館に関するラヂオ放送の件」が協議され、[13]同年九月十八日午後六時二五分より「国家の興隆と博物館の重要使命」が、荒木によって全国に放送された。[14]これについては前々稿で詳述した。

同年九月十七日に開催された理事会では「本会事業拡張に関する件」が取り上げられ、[15]同年十月六日から八日まで荒木は大阪に出張している。大阪では農業博物館・大阪市立美術館・大阪城天守閣・大阪国防館・泉布観・聖徳館・電気科学館などを見学し、日博協主催午餐会には大阪府総務部長・大阪市長・松下幸之助ほか、政財界の重鎮が出席した。[16]

同年十一月八日の理事会の議案には「本会新事業計画案実行に関する件／本会援助の地方有力者交渉に関する件」などとあり、[17]事業資金計画などが練られたと思われる。

同月二九日、荒木は日比谷公会堂における発明協会主催発明大講演会にて、「時局打開の一要素」と題した講演を行っている。その中で荒木は科学振興のための教育の重要性について説き、以下のとおり博物館についても言及している。

「第二に社会教育施設が頗る乏しいことであります。学校での教育をするに致しましてもそれを実際に実験する社会施設が少ない。最近に至っては幾多の博覧会展覧会等もありますけれども、これとてもそれを見に行く人も、これを設けた人も、よくその目的に向って利用して居るということが乏しいのであります。詰り社会教育施設が非常に足りない。又この方面に対する助長の熱意もないのであります。―中略―今日博物館の問題が起こって居りますが、あの上野の国立科学博物館ではどんなに贔屓目に見ても如何にも貧弱であります。これが世界的に日本の工業発明というような方面に対して日本の位置を現わすというのは、即ちあの科学博物館がものを言って居るのではないかと思います。これを御承知のように独逸のミュヘン［ママ］の科学工業博物館と日本の上野の国立―国立ですよ、科学博物館と比べものにならないではないか。何とか今こゝで施設をやって行かなければならない。金は掛っても報ゐられます。これは既に昭和の初頭から記念事業としてミュンヘンに劣らざる大科学博物館を建設することを吾々同憂の士は、今日まで構えて居りますが、その必要性は段々に認められて居りますが、未だに―もう十年経っても出来上がって居らない。又何時出来るか分からない。―中略―それから花を咲かせ実を稔らすということを考えますと、只今申述べたような幾多の社会施設例えば博物館の大小に拘らず兎に角町に直ぐ作る。五萬円要るというと宜しい五萬円の機械を置いて来なさい。そして納屋の隅を綺麗に掃除をしてその所にその器材を置いて町の人がこゝへ来てこの機械を使いなさいというように、そういうものが例えば東京の至る処に出来るならば、それで一つの大きな博物館ではないか、又大きな試

験場ではないか」[18]

先述した文相期の科学博物館への対応と矛盾する発言ではあるが、先の「国家の興隆と博物館の重要使命」同様、科学・工業振興のための社会教育機関としての博物館の重要性を強調している。

なお、同年十二月六日付をもって、日博協は文部省より社団法人の認可を受けている。

翌昭和十六（一九四一）年一月十二日の理事会後の懇談会には、文部次官、社会教育局長、成人教育課長が出席し、意見交換が行われた。日博協理事会に文部次官が出席するのは異例であり、荒木の政治力がうかがわれる。荒木は文部省側に「日本では国も社会も力の入れ方が足らぬ。—中略—政府は先づ各地方に科学博物館や郷土博物館の施設を奨励せねばならぬ。博物館の教育効果は迂遠なるが如くで決してそうではない。否寧ろ教育の近道は博物館の活動に俟つことが極めて大きい」と苦言を呈し、菊池文部次官より「特に科学振興は現下の緊要事であるが、各地各学校に充分な直感的設備を施すことは中々困難であるから、是非各地方に博物館的施設を致したいと思って居る」[19]との回答を得ている。

同年三月十七日の理事会では、再度事業資金に関する件が協議されており、資金獲得が日博協の最重要課題であったことが知れる。[20]

同年六月二三日、日博協主催の東京附近博物館関係者懇談会が開催された。同会で荒木は

「今社会教育の問題を考えるに、痛感されることは学校以外には教育らしいものは殆どないことである。又その学校教育も試験主義の皮相な教育で、動きゆく世界に対しては、かなり無駄が多いのである。—中略—それには博物館側の意見と、それを利用する観覧人側の意見とを結びつけて考えることが必要である。実は私は近頃国民学校を出たもの十五六人程を、先生なしで中等教育程度のことを習得させようとしている。その主義は天地が先生であり、世の中の人は皆先生云うのである。これには努力と忍耐が必要であって勉めて写本をやらせ、又博物館等をも見学させている。—中略—この様にして博物館なり、実社会から学びとらせているが、暫く経てば子供側からの要望も定まることであり、皆さんの御参考になる点もあろうと思う」[21]

と述べている。また、先述した荒木の回想に次の記述がある。

「私は其後大東亜戦争が開始されてから、全国の恵まれざる児童即ち各種事情により、当時の旧制中学に学ぶことの出来ない児童を募集し、学用品はもとより食住一切を支給して理想教育を試みたことがある。講堂にては精神教育を主とし、他の学科は大部分博物館を利用した。—中略—就中、大阪電気館は学習上に非常に工夫がしてあるのと、説明も親切であり、僅かに二日間にて旧制中学程度の教科書の電気問題はよく理解せしめ得たことを知って居る。此時講堂よりも博物館活用の更に有効なるを実験した」[22]

時期的にはやや異同があるが、荒木が子供の実践的な（中等）教育に博物館を利用したことは事実であろう。注意したいのはこの時期ころから、荒木の言説に当時の学校教育（制度）についての批判が現れてくることである。そしてそれに対抗する教育機関としての博物館、という図式が展開されはじめる。

同年七月八～十二日、荒木は再度大阪方面へ出張し、京阪地区博物館関係者と懇談し、日博協近畿支部設置の要望などを受けた。[23]また、同月二一日、郷土博物館建設に関する調査委員会、九月二二日に大学専門学校等の設備公開利用に関する第一回調査委員会に、日博協を代表し出席している。[24]

太平洋戦争開戦期に、日博協は会内に「五年計画博物館事業促進会」を設け、積極的な事業展開を計画しているが、[25]その原資とされたのが各種寄付金である。事実日博協は昭和十六（一九四一）年夏に、松永倉吉から壱千円、同年秋には松下幸之助ほかから六千五百円、翌年初頭に千田幸助より五百円など、おもに大阪方面より多額の寄付金を受けている。[26]これらが荒木の政治力によることは疑いない。

六—二　昭和十七年より十八年までの活動

荒木は昭和十七（一九四二）年二月六日に大東亜博物館建設調査委員会に出席する。[27]また同年三月三十日の理事会では、時局対応博物館事業促進計画とし

て、「現存建物を利用して東京大阪両都市に建設すべき科学工業博物館及大東亜博物館建設の促進」などを協議した。[28]

同年八月一日、荒木は夏季教育特別講座「戦時下の教育者に望む」と題し、全国にラジオ講演を行った。[29]これは「国民の資の向上の為」、第一に「練成」、第二に「求学心」、第三に「博物館」、第四に「気宇を広くして事物を観察すること」の重要性をうたったものであった。

「第三は一生を通じ又四六時中を通じて随時随所に研究し得るの道を開くことであります。講堂に入り始めて修業が出来ると考え得るは抑も未で余暇を利用し常に一生を通して研究するの方途が講ぜられねばならぬと思います。これには博物館を教室とする事が有効と存じます。博物館は先ず現実の物によりて深刻に考えさすので次から次へと連想が浮かびもし文章の学問でなく、直ちに実際にも入り得べく、又国民学校に於て学びし博物館は専門家となりても、同一教材として凡ての物がそこに存在する故に幾多の便益があり、又唯学校在学中が教育期であるとの謬見より脱け出て、一生を通じての教育道場として利用出来るのであります。これが為には現在の様な陳列場以外に出ず展覧用丈けの博物館では駄目であって之れを教育に活用するの整備と指導とが必要であります。館員即教師であり教師は即ち館員である様にならねばなりませぬ。此意味に於て其指導者即ち博物館を教室とする館員に対し教師の再教育が肝要となるのであります」[30]

ここには荒木の、博物館が展示中心より脱し、「館員即教師であり教師は即ち館員」となるため博物館員の「再教育」が必要であるとの説が読みとれる。

日博協は、同年九月九日文部大臣に「博物館法令制定に関し陳情」書を提出している。「博物館行政の不徹底」「与えらるべき特権の抑留」「適材獲得の困難」を掲げ、「図書館及よびその従業員は、爾来学校職員同様、国家の保護を受けつゝあるのに拘らず、独り博物館のみが、教育学芸の機関として未だ国家から認められず、博物館員が教員職員として当然与えらるべき国家的待遇を享受し得ないことは、吾等の甚だ遺憾とする所である」[31]などと強く訴えている。ここにも当時の荒木の影響を認めることができよう。

また荒木は同年秋の新聞論説[32]において、さらに持論を展開し、博物館の「運用者は教育者」であると断じ、博物館教育の学校教育に対する優位性を強く説いた。

「社会が一生を通じての学校であり練成所であり研究所であらねばならぬ。教育義務の有無を問わず好むものは常に時と所とを問わず練成し修業する機能を国家が与えることが肝要であろう。図書館、博物館の活用増設の重要性はこゝに存すると云わねばならない。―中略―我が国民一生の教育機関として説く博物館は社会通念の如き物品の単なる展覧陳列の場所ではない。一つの系統を持った研究機関の謂である。立派な絵画、彫刻、機械もそれ自体は一つでしかないが、それに対する研究者は学生あり研究家あり一般人あり決して一様ではない。と同時にこれら多様の人にもその階級が違い人が異なる如く一つの対象に対する頭脳の作用も決して一様ではない。吾々が一枚としか見ない絵も、観る者の教養、環境、人柄によって無限なる弾力性を持って人を教育する。博物館は偉大な所である。博物館が一生の教育機関たらんがためにはこの運用者は教育者であらねばならない。かくてこそ今日の学校と相並んで人生陶冶に必要なる道場たり得るであろう。即ち自由にその人の意思に応じて、響く立派な教育機関となるのである。―中略―教室に於ける教育は先ず耳より物を詰め込み然るのち物に到って了解する方法であり、博物館は先ず実際に物に触れて頭脳の働きを刺激し、その後、図書や指導者により啓蒙されるのであるが、この両者は小さい幾多の例に徹するまでもなく後者の優越性は余りにも明瞭である。一を聴いて十を知る教育とはこのことであり、而も実行的な大きな知識と判断力はかゝる制度に於て養われるように考えられる。この点に就て、最近喧しく論ぜられている科学振興の問題にしても、ニューヨーク、ロンドン、ミュンヘンのすぐれた科学博物館と我が国のそれに相当する上野の科学博物館の規模を比較対照するとき、我が国の科学の進歩がどの程度のものであるかゞ察知されよう。世間は動もすれば博物館を目して、展覧所、骨董品陳列所、コレクション所となす向の多いのは思わざるも甚だしいと云わねばならぬ。いま我が国が世界新秩序といゝ、新体制と云い、また東亜共栄圏を自己の指導下に置くという点に於て、莫大な時と人を空費して物識りを作るような道楽的教育に満足する暇すらないと思う。大東亜博物館建設の意義も亦こゝに存する訳である」[33]

同年十一月十八～二一日に開催された「博物館従業員講習会」における、荒木の「大東亜戦争と博物館の使命」と題した講演には、より直裁に荒木の学校教育（制度）批判が表れている。

「今までのような、唯理屈が多くて、記憶力が好い者が成績が好いというような教育では駄目である。今までの学校の優等生は皆な記憶力の好い生徒であった。—中略—こつ、勘を学んで来て、こうなったから、どうなって行くということを考えて行くようになる。勘、こつというものを覚えて行く、と博物館というものが勘の中心となる、教育の中心となって来る。—中略—まだ幼稚なものではあるが学校とか博物館とか、図書館とかを出来るだけ結付けることが必要であり、指導者がそういう頭を以て引張って行くということになれば、この聡明な日本人の頭は急速に動き出すと思う。記憶力をさらに実際に働かして行かなければならぬ。—中略—工場、学校を学問的にしたものが博物館であり、立派な研究所である。学問と実際とを合せて動かすところのものが博物館である。どうぞあなた方の御主宰になって居る、御関係になって居る博物館をして学校に代らして頂きたいのである。学校はバラックの吹き流しの中で一時間で結構である。後は全部博物館を廻らせながら、その長所々々を活かして行くように、一つ御指導をして頂いたら効果があるんじゃないか。—中略—博物館を中心としての生徒募集をしてはどうかと思う。学科の予科でも作ったらどうかと思う。—中略—その為には人を作らなければならぬ。その人を作る根抵は、郷土博物館でも宜しいと思うが、皆さん方がお互いに連絡を取られて、一つ博物館大学校というようなものを一つ作って頂いたら結構だと思う」[34]

ここではもはや学校教育との連携は放棄され、荒木は「博物館をして学校に代ら」せるとまでいう。

翌昭和十八（一九四三）年一月五日の新聞論説では、文部省による教育年限短縮についてふれ、「又年限短縮についても年限短縮敢て不可ではないと思うが深みを与えるためには更に年限を延長するのもいゝのではないか。これを他の例でいえば学校における教育はすべての終局を告げるものではなくして学校を出てからの社会に立っての教育において、即ち一生を通じての教育が絶えず行われて真の教育が出来るのであるし、人間社会が向上して行くものではないか。すると社会教育即ち学校を出てから敢て学校に通わぬでも自ら研究するところの博物館的施設を向上して博物館即学校社会一生の学校、之を今の学校の延長として十分に活用する施設に万全を尽し努力をする必要があるのではないか」[35]とし、博物館を例としながら暗に年限短縮を批判している。

同年五月十一日には、新聞論説において自らの大学改革を回顧しつつ、「学校は単に修業にその礎石を置くだけの事で一生を通じての教養の土台を仕上ぐる」のであり、「故に教育は之を考慮すると共に大学始め凡ての学園は無暗に八ケ間敷く狭隘な修学の入口とする事なく随所随所に向学修業心旺盛なるものゝ教室、研究室、道場としての開放が大胆に考案されねばならぬ一方、博物館、図書館の如き社会教育機関を学校と併行して其便を得る如く促進し以て一生を通じて休まず向上進歩し後日の諸施設が大学教育施設としても考えねばならぬ事を附言して置く。国民皆学は国家興隆の鉄則である。一生の修学は其実質である。無論何を学ぶかは別としても時に応じて造りたる制度規則の鉄扉を以てその入口を狭隘にしてはならぬと信ずる」[36]として、大学教育施設としての博物館の設置と、その開放を提案する。

同年十月の『博物館研究』では、「源深き泉は涸るゝことがないのと同様、教育の基礎堅き国民は少しの事では揺るがない。次から次へと、機に臨み、変に感じて、適当なる方策を取り得るものである。これ即ち教育の深さから来るのであって、そのためにはその教育が形式の学校教育に終わらず、実力培養に最も長期の生命と基礎を有する社会教育の振興でなければならぬ。而してこの社会教育振興の具体的設備中、最も重大な役割を演ずるのは博物館なのである。—中略—併しながら、これを具現するために、目下の急務は博物館の活用であり、且つ博物館を教室とする練達の教官なり、指導者なりの養成である。目下博物館の振わざるは、陳列本位の旧態を脱せず、死んだ博物館となっているところにあると考えらるゝ。教育機関として、この指導者養成に今や一大工夫と努力をすべきである。—中略—今や内外を顧みて、目覚ましき国家活動を必要とするに当り、世人は博物館の重要性を認識し、その活用を工夫し、その指導者の養成を急ぐことは、学制改革問題以上の実際的な重要事であると信じる。重ねて言う、今日までの世相が余りに現実の変化に焦慮して、却って基礎の建

設を等閑に附せしことを遺憾とする」[37]として、教師としての博物館職員の養成の必要性を再三強調し、またそれが「学制改革問題以上の実際的な重要事」とさえしている。

また同月三十日には「日本博物館協会創立十五周年記念式典」において、記念講演「時局と博物館の使命」を行い、「この戦局中に国民資質の向上に力を注がずば、戦争に勝ち得ても、遂には戦後建設に落伍すべき運命を辿るのもやむなきに至るのである。この際、国民の資質向上を図るために一大機関たる博物館の活用を国民に奨励することが最も大切で、そのためには、よろしく指導階級の啓蒙運動を起こすことが肝要である。また同時に、博物館が単に平和時代の文化事業に過ぎないというような理解と熱に乏しい誤った考え方に対しては、大なる反省を促す必要がある」[38]として、博物館の戦後復興における重要性にまで言及している。

六―三．昭和十九年より日博協会長辞任まで

その後荒木は、翌昭和十九（一九四四）年一月二六日の理事会および同年五月十五日の「東京及東京附近所在博物館関係者懇談会」に出席したことが知れるが[39]、戦局の激化によるのであろう、『博物館研究』も「昭和十九年十、十一、十二月合併号」、「昭和二〇年一、二、三月合併号」をもって休刊したと思われ、その活動は明らかではない。

戦後荒木がいつまで日博協会長であったのかも定かではない。昭和二一（一九四六）年二月の『博物館研究』の「協会消息」には、「荒木貞夫男（会長）戦争犯罪容疑者としてさきに巣鴨拘置所に収容された。これにより本人は辞意を洩らされたが本会としてはこの問題は当分保留している」[40]とある。

おそらく同年夏に発行されたのであろう『博物館研究（復興第一巻第一号）』に、「我が協会は戦時中、交通の不便物資の欠乏等の為め十分の活動を許さず、事業の大部分は一時停止の已むなき状態にあったが、終戦と共に再び起ちあがり出発の門出に於て、新たに会長として徳川宗敬伯、顧問に前文相安部能成氏、理事長に貴族院議員川上嘉市氏の就任を見るに至った」[41]とあり、同年春～夏ころに荒木は日博協会長を辞任したと思われる。

結　語

以上を検討すると、以下のとおり、荒木の日中戦争期の博物館像の変遷を整理できる。

一．文相期（昭和十三～十四年）学校教育改革などに集中し、ほぼ無関心

二．日博協会長前期（昭和十五～昭和十六年）学校教育を補完する社会教育機関

三．日博協会長中期（昭和十七～昭和十八年）学校教育機関に代わりうる存在

四．日博協会長後期（昭和十九～昭和二一年）不明

その生い立ちや、文相期の学校教育改革などの活動から見て、荒木は学校教育に強い関心を有していたことは疑いなかろう。その思いを断たれた荒木は、日博協会長就任とともに、博物館教育に関心を向けることになる。その根底にあったのは、当時の教育（制度）への批判であったと見てよい。荒木はまず何より、博物館における実践的な教育に期待した。その後、学校に代わる教育機関としての博物館を理想とし、その普及・振興につとめたのである。

日中戦争前期の中等教育機関以上への進学率は、現在とは比較にならぬほど低かったと思われる。太平洋戦争にともないさらに悪化する学校教育環境下、荒木は新たな教育への可能性としての博物館を、夢想していたといえるであろう。荒木の活動にもかかわらず、彼の説くような博物館は実現しなかったが、さまざまな意味で日博協、そして博物館に資したことは疑いない。

最後に、こうした荒木の博物館に関する言説からは、体制的、軍国主義的に偏向した主張を看取することはできないことを附言しておきたい。むしろ総力戦体制下の当時の教育政策、制度の不備を批判するような発言が目につくことは事実である。前述したようにそうした言説は日博協会長中期以降、すなわち太平洋戦争開戦以後に顕著となる。

憶測すれば、いわゆる陸軍の皇道派・統制派の権力闘争以来の問題から連綿と流れる、荒木の東条英機内閣への間接的な批判がそこに存在するのかも知れない。軍や政界から隠退した荒木にとって「博物館」とは、そのための格好の題材であったとも考えられる。晩年荒木は、次のように日中戦争期の自らの心情について述べた。

「日本をして、今次大戦の方向に導いたこと即ち戦争を阻止することが出来なかったこと、および戦争に入って後においては、ある段階において、これを処理して和平を結ぶことの努力をなし得なかったこと、この二つの重大事については、深く自らの責務を感ぜざるを得ない。日本人の多くは、東洋流の考え方から、自らの気にいらない世潮に対して超然とし、竹林の七賢人的に遁世し、世潮の進む方向に体をかわす傾向がある。何故自ら進んで世潮の進まんとする前に身体を張ってこれを阻み得なかったか、このことについて深く反省し責任を痛感するものである」[42]

註

1 後々田寿徳 二〇〇六 「荒木貞夫にみる日中戦争期の博物館像（一）」 東北芸術工科大学紀要 №18

2 橋川学 一九五五 『嵐と戦ふ哲将荒木』 荒木貞夫将軍伝記編纂委員会 四七二頁
※以降、引用文中の旧漢字、旧仮名遣いは改めたところが多い。なお誤字脱字と思われるものは改めていない。

3 荒木貞夫 一九三九 「陸軍現役将校学校配属令公布十五年記念講演」 文部時報 第六五七号 十六頁

4 鷹野良宏 一九九二 『青年学校史』 三一書房 一七八頁

5 註4前掲書 一八〇～一八二頁

6 註2前掲書 五〇二～五〇七頁、荒木貞夫 一九五五 「巣鴨から出て日本を見る」 政経指針 十三～十四頁

7 後々田寿徳 二〇〇五 「研究ノート：荒木貞夫と〝国家の興隆と博物館の重要使命〟について」 東北芸術工科大学紀要 №17

8 朝日新聞 夕刊 昭和十四年五月十六日

9 宮本百合子 一九七九 「獄中への手紙」『宮本百合子全集 第一巻』 新日本出版社 二三三頁

10 国立科学博物館［編］ 一九七七 『国立科学博物館百年史』 三四一頁 には「博物館事業に深い関心を持っていた当時の文部大臣陸軍大将荒木貞夫は、科学研究の重要性を認め、国力の拡充は科学的基礎の上にその確立を図らなければ完璧を期し難いとして、それまで社会教育機関の一つであった本館を、学術研究体制の一環に組み込もうとして、昭和十四年八月十五日東京大学教授坪井誠太郎を本館々長に兼任発令した」とあるが、文相辞任直前の時期であり、また根拠が不明である。

11 「文展顧問会議」 朝日新聞 昭和一三年七月二十日 当時正木は文部省の美術行政顧問でもあった。

12 荒木貞夫 一九六一 「博物館事業と棚橋源太郎翁」 博物館研究 三四巻二号 二頁

13 日本博物館協会 一九四〇 「本会記事」 博物館研究 十三巻八号 七頁

14 「ラヂオ［欄］」 朝日新聞 昭和十五年九月十八日 なお同講演は午後七時まで行われたと思われる。

15 日本博物館協会 一九四〇 「本会記事」 博物館研究 十三巻十号 七頁

16 註15前掲書 五～六頁

17 日本博物館協会 一九四〇 「本会記事」 博物館研究 十三巻十一号 七頁

18 荒木貞夫 一九四一 「時局打開の一要素」 發明 昭和十六年一月号 二五、二九～三〇頁 なお同講演は 雄辯 昭和十六年二月号 二～七頁 にも採録されている。

19 日本博物館協会 一九四一 「博物館問題懇談会席上にての談片」 博物館研究 十四巻一号 四頁

20 日本博物館協会 一九四一 「本会記事」 博物館研究 十四巻三号 七頁

21 日本博物館協会 一九四一 「東京附近博物館関係者懇談会」 博物館研究 十四巻八号 五～六頁

22 註12前掲書 二頁

23 日本博物館協会 一九四一 「京阪本会関係者懇談会」 博物館研究 十四巻九号 七頁

24 註23前掲書、日本博物館協会 一九四一 「本会記事」 博物館研究 十四巻十号 七頁

25 日本博物館協会 一九四二 「本会総会」 博物館研究 十五巻一号 七頁

26 註23前掲書、日本博物館協会 一九四二 「本会記事」 博物館研究 十五巻二号 七頁、同上 博物館研究 十五巻三号 七頁 ちなみに総務省「消費者物価指数年報」による戦前基準東京都区部五大費目指数で物価を換算すると、二〇〇四年は一九四二年比で約九〇〇倍となる。

27 日本博物館協会 一九四二 「本会記事」 博物館研究 十五巻三号 七頁

28 日本博物館協会 一九四二 「本会記事」 博物館研究 十五巻四号 七頁

29 「ラヂオ［欄］」 朝日新聞 昭和十七年八月一日 放送は午前十一時より正午ころまで行われたらしい。

30 荒木貞夫 「世界的日本人の基底」 国立国会図書館所蔵荒木貞夫文書第六七一・六七二（前者はガリ版刷、後者は弁護士菅原裕事務所の原稿用紙にペン書） 採録は註2前掲書 五三四頁 より行った。

31 日本博物館協会 一九四二 「博物館法令制定に関し陳情」 博物館研究 十五巻九号 六～七頁

32　荒木貞夫　一九四二「皇国民教育の真髄（上）学ばんとする意志」国立国会図書館所蔵荒木貞夫文書第七二六　誌名発行年月日不明　文中に「事変五周年を迎えた秋」とあり、昭和十七年秋とした。

33　採録は註2前掲書　五三二〜五三三頁より行った。

34　荒木貞夫　一九四三「大東亜戦争と博物館の使命」博物館研究　十六巻一号　二〜三頁

35　荒木貞夫　一九四三「戦争と教育の刷新　花よりも種を」読売新聞　昭和十八年一月五日

36　荒木貞夫　一九四三「大学改革の志向①　世界的日本人を養成」朝日新聞　昭和十八年五月十一日

37　荒木貞夫　一九四三「博物館の重要性」博物館研究　十六巻十号　一〜二頁

38　荒木貞夫　一九四三「時局と博物館の使命」博物館研究　十六巻十二号　二頁

39　日本博物館協会　一九四四「本会記事」博物館研究　十七巻二号　八頁、同上「東京及東京附近所在博物館関係者懇談会」博物館研究　十七巻六、七号　四頁

40　日本博物館協会　一九四六「協会消息」博物館研究　十八巻一号　十五頁

41　棚橋源太郎　一九四六「新幹部を向ふ」博物館研究　復興一巻一号　一頁

42　有竹修二［編］一九七五『荒木貞夫風雲三十年』芙蓉書房　二四〇〜二四一頁

執筆者

後々田寿徳　学芸員課程　専任講師

GOGOTA Hisanori　Curator Program/Lecturer

The ideas of the museum by Sadao Araki during the Second Sino-Japanese War period (1937—45) [Part II]

GOGOTA Hisanori

V. He was forced to resign as Minister of Education (1938-39), although he had a desire to struggle for educational policy.

VI. He made efforts to popularize and promote the museum as chairman of Japanese Association of Museums (1940-46).

Araki attends to the museum education with his assumption of the chairman of Japanese Association of Museums. His dissatisfaction toward educational system in this period makes his attention turn to the museum. He expects that the museum can be the place where people have practical education, and then he tries to popularize and promote the museum so that the museum can become the educational institution in the place of the school.